

一生を貫く
「小さきもの」への
視座と夢

「河合ブックレット」の掉尾を飾る一冊



「九八〇年の日付附出」の
「河内」の目録附出に手
來、河内文化研究所が
掛けた「河内」の所
に「河内」が四項目と
なる西宮源氏の墓と一同
なると密閉した。河内
内河内墓を母体しながら
は、個個異なり型は多數
を有するが、基本的な
大學で教員が垣根より取
まなない、其に數が中々
師達との舞臺に上られ
て、河内文化にはなれま
す。この研究、河内活動エ
ンである、大學が河内を
國を務めた。本書の解説、河

渡辺氏は、まさにこの号風にまわいられた。制度の中の専門知とは別の、彼

の育まれ、それを確立する現代文明を見据えた抵抗思想家だからだ。知と信とは不可分であり、文学と思想が分かち難くひとつ二世紀ロマンの精神世界に惹かれ、少年時代ロマン文学を育った虹の退屈の持主として、『荒野』所収の「虹」(新編、笠書房)取りのズエルナークの園城の木末エレンに、その園城とは「畏れわたる」への脱却ではなく、田代文男といふ必然の彼方に、痛くも掲げられた希望の虹だと彼は述べたが、その虹を現代文明の荒野に根ざすことを含んだ稀有な内容だった。それゆへ彼は、物質主義が異化したクロハルなどにはまな金銭羅刹の支配にも、はなま自由・平等・人権などの近代主義的な觀念世界の肥化文化にも「生配」でも抵抗した。悪義共産主義の極相を示唆する野獣をゆく彼のパンシオン

かが、何分しられてゐる。本書の解説にある描のとおり、私も二ヶ月と前池本町から市電に乗って、健康神社近所の閑静な一角であつた渡辺の自宅を訪ねた。完結した渡辺の二評論集『全四巻 羣書房』を掲げて、書評者人間が珍しく飛來したとあって、彼はまさか少年のよう相好を崩し、熱を込めて語つた。当時、精神を過ぎたといふ思ふは、七神の強襲を、いまも若きときと思出す。同じく飛出身の谷川健一・谷川雁彦・吉田公仁（本エディター・ス・クル創設者）の誘いで、本紙と縁の深い日本読新聞に入つた一九六二年半のころを昨日の如くに振り返り、さういふ話は縦横にかつて、月夜に來たお坊さんが唱へる説話も氣にせず、何時間も語つたたにせよ。本紙二〇〇一年九月一日号収録。

近感。そして本と人間、歴史と時代とを自由に鑑選して上げながら、一貫しめずせて人の人生における初めの問いと思索を語を貫いてくつ語り口に、強く魅せられた。

一九三〇年生まれの彼は、幼少期を北京と大連で過ごし、敗戦後、大連日本兵揚子対策協会の活動でマルクス主義と出会う。文学で自由を求める自分と、マルクス主義に惹かれた自分とは相容れず、矛盾を生きたるを忘ながら、自分の個をコミュニストであった自分が、ロシアの国章である「双頭の鷲」のように分裂し、引き裂かれる。群れに属し、一人でしかいられたらと思いと、群れのなかで理想求めていく志向の矛盾。それ以後後の共産党活動でさらに深まり、彼自身の大きな欠点となる。

個と共同的なもの、知識人

く大世紀ロシアのイマニ、ケツツニアを苦しめた「始」に負なない（呪わし）問題であった。共産主義ではそれを「正統的な主体主義でねじ伏せさせておける」という問題が、問題は二〇世紀の知性、可成りな問いとなる。渡辺氏の抱いた問いは、世界普遍のそれに通じるものである。彼の場合、さらに軍国主義少年から「ユニスト」の姿身、そして転向と重なっている。近代的な個の志向として、魂の近代性を求めたといふ欲求の絡み合い、そしてそこから出てくるバリエーションで日本近代史を見つ視望するものは、近代の根を掘りける掘り顔の作品。歴となり、やがて「逆き世の面貌」を頂とする為の作品へと結実してゆくのである。

渡辺氏にとつての思想的原体験は、結核療養所「過」した四年半、ゴッキの表現を思わせるこの「私の大学」であったといふ。私はこの

めて触れた。そしてその
実直な民衆の姿から、観
から観念へ、つゝ軍閥
から共産黨員へ、無限
動しての自分といふもの
を見直すようになるのであ
る。

渡辺氏は療養所で『民衆
原像』に触れた。一九七
に出た初めの評論集『民
の死』（『筆書房』）の
の文章が思ひ出される。い
までもなく、これは彼の思
ひの核を形づつた療養所
で体験が元になっている。人
社会の進歩の歴史や、世界
の展開なかで、打ち捨て
れ、犠牲され、忘れ去ら
れてゆき、小さきものを
の当たりにし、その運命の
の不向きを超えんと思ひ立
つと、彼を突き動かすす
の原動力があったのだ。

昨年刊行された『小
の近代 上』（『書房』）
開いて、第一章『緊急避難

う。小さきもの「を」見ようとした。「小さきものの」の年からは、世紀近くの懸隔が、初世の間に戻るやうに、そこには次のやうな急難として始まった代のビッグ・ストリーは、動かぬ。だが私は若い九代を思い出し、國家主義といふものが、私を支えられ人びとで言へば、小さきひとが、新以来の大變動と多變、自分身の近代」に出たために、このやうな思ひだしたのを語りつゝも、は贅言を費すまじない。ここに彼の夢と思想が存分に込められた。本書『夢と二生』を讀んで読むとき、讀者は開いて讀むべき、読者は開いて立つ虹を見ることであらう。

(本紙編集長・米田綱)

(本紙編集・米田綱路)

渡辺京二著『夢と一生』(河合文化教育研究所)を読む

北京 夢と生

一九八〇年の日付附出の「河合文化教育研究所」から、河合文化教育研究所より「河合アクリル」上「リリー」が四冊目と「河合清見」氏の夢と「女々」を併刊した。同刊後、河合塾を母体としながら、個個類型型の教育方針を貫き、極めて

育まれ、そこを席巻する現代文明を見据えた抵抗の思想家たちだ。知と信とが不可分で、文学と思想が分かち難く結びつく一九世紀ロシアの精神世界に惹かれ、少年時代にロシア文学を育った虹の思想の持ち主、『荒布に立つ虹』

か、存分に語られてゐる。
本書の解説にある描写のと
おり、私も二年ほど前、熊
本駅から市電に乗つて、熊
神社近くの閑静な一角にある
渡辺氏の自宅を訪ねた。完結
した「渡辺日記二評論集成」全
四巻（『龍書房』）を目撃し、書

近感、そして本と人間、歴史と時代とを自由に交錯させて広げながら、一貫してみずから的人生における初発の問いと省察で話を貫いていく語り口に、強く魅せられた。

一九三〇年生まれの方は、幼少期と北京と天津と國境を

く一九世紀ロシアのインテリゲンツィアを苦しめた「始原的累積の貧乏」の問題は、資本主義に負えない（呪わしい）問題だった。共産主義はそれを革命的な全体主義でねじ伏せたが、問題は二〇世紀の知性や奇み続ける問いとなる。渡

めて触れた。そしてそこから
実直な民衆の姿から、観
念へと、つまり軍国主義
から共産黨員へと、無限に
動している自分というもの
を見直すようになるのであ
る。渡辺氏は療養所で「民
衆と触れた。」（一九五二

「小やきもの」を見つけた。『小やきもの』の懸隔は半世紀近く、初発の問いに戻るに、そこには次のようであるのである。急避難として始まった家の形成・展開こそ、